



## 針葉樹會報

第五十號記念増大號

とりとめもなく

松木謙三

もう五十號を發行する様になつたつて早いものだ。又よく續いて居るものだ。昭和五年に會が出來て毎月例會を開くこと、會報を出すこと。年三、四回山登りをなすこと、三つ定められ、そして幹事二人を置いて一人は會報、一人は例會と登山のプランを立てることになり、僕は會報の方を受け持ち、近ちやんが會計だつた様に思ふ。何しろ會員は僅か十七人、會費は少しあらぬので一生懸命安いプリント屋を探したもんだ。そして今川小路を少し水道橋寄の牛乳屋の二階を間借りをしてゐる人が馬鹿に安く細かい字で書いてくれるのでそれに頼んだ。さてどんな字体にするか僕は綺麗で整然としてゐるので四角四面のやつにしてもらつて第一號をやつて見た處見事失敗、方々から読みにくいたの誤字が多いのだのと苦情が出るので第二號からは早速普通の字体に變へてプリントの校正までやつた。カットは畫才の少い針葉樹會のこと故針葉樹第一號の熊さんの表紙に松倉だつたか手を入れたのじや

なかつたかと思ふ。カットはその後三回變つて來たが段々模様らしくなつてゐる様だ。

第一號第一頁を飾るのも近ちやんとベンちやんの「本體はいづれぞ」の漫談に始つてゐるが、今でも御兩人共最も皆を喜ばせるものを書いて下さつてゐる。實際針葉樹會報からお兩人のものを抜いたら案外無味乾燥のものだらう。尤も昨今は……太夫なども出て來たが。

今と比べて僕がやつて居つた時は最後の消息欄、記録に力を入れてゐました。これは人數も少く且年配も餘り異つて居らぬので各人の様子がよくわかつて居つた爲もあつたらう。又記事が少くつて頼んで書いて貰つて居た様の始末だから餘白が出來た勢もあつたが。

五十號を迎へて特に希望するならば御常連ばかりが紙面を賑はしてゐる様だが、短くつてもつまらんことでもなるべく多くの人が投稿してくれることでないでせうか。そう云ふ自分も餘り書かない方だが。特に關西方新進連中にお願ひします。

## 編輯一年間

園山徳三郎

僕が小川君から針葉樹會報編輯の役目を引繼いだのは昭和九年の三月であつた。それから芋川君にバトンを渡すまでの一年間に就いて思出を語らせていただかう。

先づ僕の編輯役には二つの特色がある。その一つは、この役を

自分から求めて引受けたことであり、も一つは謄寫版印刷の最後の役であつたといふ事だ。何故自分から進んでこの役目を引受けに至つたかと言へば、話せば永い事ながら、僕は卒業後軍隊に入る前までの九ヶ月半ばかり針葉樹會の會計幹事をやつてゐたのだが、勤の多忙から思ふ程の仕事も出来ず、入營後は金田君に任期の後半を代つて貰つたり、散々の不首尾だつたものだから、自責の念に堪えず何かお役に立ちたいものと考へてゐたからである。格別の才能があるぢやなし、編輯校正が好きぢやない僕が、押し付けられもせぬに買つて出て勤め上げた一年間、手際の拙なさは諸兄御熟知の如くだが、以上の經緯御憫察願ひたい。

又、芋川君が初めて實行した活版印刷のお蔭で、偶然にも僕はプリント時代の最後を飾る光榮ある編輯者となつてしまつた。現在豫科二年の岩崎君あたりが針葉樹會の最古參長老となる頃は、會員の人數も内地の山の數ほどのになつてゐるに違ひない。その頃、いまの増山君の様な考證家が現はれて、

針葉樹會報歷代の編輯幹事の業蹟を調査致しました結果、原始的な謄寫版といふ博物館的道具に依つて印刷いたしました時代は園山某といふ幹事を以つて終り、それ以後芋川稔一（ネン一ではあります）といふ有爲な幹事の手に依つて現行の活版印刷となつたのであります。

と言つた具合の論文を發表するに違ひない。園山某なる名もこれで永久不滅となる譯だ。

そこで謄寫版時代の最後を飾る僕が、將來の爲に考古學的資料としてその編輯校正の大要を會報に載せて置くならば、増山君の第二世第三世に稗益する所大であらうと信ずる。で大體の所を書き、先づ原稿を集めねばならないのである。プリント時代には刷り上つた出來榮えが活版の如くには美事でないせいか、頼んでも仲々原稿を書いてはくれなかつたし、又長篇物は甚だ稀であつたのである。これが爲には平常からビンチヒッターを養成してをかねばならない。そして如何にしてもあと何枚かの原稿が必要であるといふ場合に此のビンチヒッターを起用するのであるが、この人を得る事が非常にむづかしい。かの中川氏の如きは則ちこれであつて適時にヒットを出して呉れたのであるが、お蔭で僕は一生天涯あの人に対する頭が上がらなくなつてしまつたのである。別に借金をしたわけでもないし、あの人の道具を誰かの様に失敬したわけでもないのに威壓を感じるといふのは、外ならぬ窮迫時の原稿のお蔭なのであらう。又、中川氏のほかにも編輯者の立場から感謝すべき人は多々ある。中でも思出の多い人は倫敦の關守三郎君だ。遠い異郷で自動車を操縦しての遍路の日誌を細々と丹念に書き送つて呉れたものだ。然しあれをそのまま、印刷屋に廻す事が出来ないので一々原稿用紙に寫し直さればならない苦勞は相當なものであつた。何故なら、あれは彼の故郷越後に在る老ひたるムツターサンへ僕の手から直ちに轉送する義務があつたのだから。一ヶ月も手許に止めるわけにはいかなかつたのだ。原稿の寫し直し言へば磯野君のスイス紀行もそうだつた。ベツタリミワット

マンか何かの紙に書き込まれた原稿では字数の計算も出来ないので、普通の原稿用紙に書き直したのだった。活版印刷と違ひ組んだ活字を動かし得ない謄寫版では、出来るだけ總字數を計算して一定の頁數にピツタリ適合させてをかねばならない。そして印刷屋から送つて寄越す原紙と原稿とを引合せ、正誤は鐵筆で原紙に書き込む。あの判讀しにくい原紙の細字を読むのは可也辛い仕事ではあつた。それでも校正通りに印刷屋が訂正してくれゝばいゝが、原稿用紙に赤インクで校正するのさはちがつて原紙へ鐵筆で書いてをくのだから時には印刷屋も見逃がして、誤つたまゝ印刷されてしまふ事もあつた。殊に巻末に僕の載せた穴埋の文は常に校正なしなのだから、いくら念を入れろと注意してをいても一字や二字、甚しい時には一行位も脱落誤記のある場合がある。随分情なく思つた事もあつた。尤も滑稽なのは巻頭のカットが毎號々々幾らかづゝ模様が變つて行き、仕舞には何の圖案なのか判別出来なくなつたことである。あゝいふ事は謄寫版印刷といふもの、大きな缺點である。

思ひ出しながら書いて行けば限りはない。然しそんな事は僕一代で終つてしまつた過去なのだから、新時代の此の會報に載せるべき性質のものではない。これ位で僕の繰り言は止めにして新らしい針葉樹會報の發展を祈ると共に、現在及將來の編輯幹事に對する會員諸氏の熱烈なる援助を期待する次第である。

山岳會の會報となるとさうくだける事も出來ないがこつちの方はその點で長續きがしてゐるんだらうと思ふ。そしてたまには近ちやんの様な恐ろしいのが居て投書した數を調べ之等の人達を断頭臺上に並べて搦め手から催促するんだから全く書かざるを得なくなる。

地方に居て一番樂しみなのは山の仲間からの手紙と此の會報だ。殊に會報となると内の家内の方がヨリ以上ファンなのだから面白い。此の頃ちや誰の綽名も皆覚えて了つてアハ、アハ、と腹をよちつて喜んでゐる。長女の梓なんか近ちやんをつかまへて「コン

## 五拾號の記

吉澤一郎

針葉樹會の出來たのが僕等が卒業した翌年五月頃、丁度私が名古屋からルンペニとなつて東京へ引上げて來た頃だつた。増山君の話による多摩川のスキ焼きを行つた電車の中でその相談が持ち上つたものらしい。會報第一號の出來たのが翌年の五月頃だつたと思ふ。尤も四月中旬には私は已に大阪の吹田へ引越し了つてゐるから判然した事はわからない。松木の謙坊が第一號の編輯をやつたと記憶する。それから手塚、園山、芋川と其の他にも居たと思ふが實際よく此處までやつて來たものだ。私の記憶にして誤なければ日本山岳會の會報は浦松氏の發案になるもので、その又源が吾が針葉樹會報なんだから山岳會の會報から見れば生みの親見度いなものだ。號數も丁度同じ位になつてゐる。向ふも確か今度は五十號位だらう。

山岳會の會報となるとさうくだける事も出來ないがこつちの方はその點で長續きがしてゐるんだらうと思ふ。そしてたまには近ちやんの様な恐ろしいのが居て投書した數を調べ之等の人達を断頭臺上に並べて搦め手から催促するんだから全く書かざるを得なくなる。

ちやんてタヌキの事でせう、それなのにどうしてしりつぼがないの?」なんて不思議がつてゐる。全く會報は色々な意味で有難い存在である。五十年先になつて(尤も統計による)現在三十歳のものは余生三十二が平均となつてゐるが)六百冊の會報がズラリと書齋の一隅に断然收まり返つてゐる圖を想像するに愉快だ。日記よりも面白い記念物となるんだから關西以西、北海道方面の人なんかもせいど書いて置いて貰ひ度いものと思ふ。

(10,10,1)

### アルプスの意義 ク マ

W.A.B. Coolidge の著、"The Alps in Nature and History" の序頭第一章に出でるもの、今更相變らぬ金釘流の迷譯迷文で恁んな事を書いたりするミオミオツケで顔を洗つて來いなんて云はれるかも知れぬが何かの参考になるまい事もない、我慢して讀んで戴き度い。

×            ×            ×

本書(前記の著書)の讀者にして本章の表題を爲す問題に對し即答を與へ得ぬ人は殆どない事と思ふ。著者がしかく確信を以て云はんとするアルプスがヨーロッパの中央山脈に附與された名稱である事は勿論である。乍併諸者は此の點に關し些かの疑問があるのではないかと多少の疑懼を以てたづねるかも知れない。吾々は今迄長い間此の言葉に依つて欺かれ或はカツがせられてゐた

のであるまい。或は又著者が讀者に難問を投じたのであるまい。

此の後者の方の疑問は直ちに消散され得るものである。然し前者には一應眞理の萌芽を含んでゐる、と同時に其の疑問が自分の都合にいゝ様に考へた程、確實な根據によつたものでないといふ事は躊躇ながら認めてゐるに違ひない。勿論右の言葉の意義は山中に定住せぬ人々の間に廣く承認せられたものであり從つて山の住民 (Alpine folk) よりも數に於ては著しく多いものである。乍併仔細に之を考究する時に吾々はアルプスの住民達が問題の名稱に上述のものとは全然異なつた意味を附與してゐる事を發見する。即ち彼等がアルプスといふ時には雪線下の山側に廣く展開し且つその村よりは遙かに高所にある高山の夏の牧場を意味してゐる如くであるのである。山の住民に之つては此の意味に於けるアルプス "The Alps" は生命に關する實際的な重要性を持つものである。何となれば夏の高地牧場は山の住民の全社會經濟が展開される中心地だからである。若し此の高地牧場がなかつたならば夏季に於ける家畜は怎うなる事であらう。村近き牧場は單に冬の飼料を供給する許りであるからである。若し又此の家畜がなかつたならば山の住民の全牧場生活は其の根柢を失ひ不可能となるより他はなくなるのである。

以上の如き意義は之を幾世紀かの昔にまで遡らす事が出来る。事實、一般に信ぜられてゐるものと孰れの意義がヨリ古いものであるか、又その原義が何であるかは暸り知る事を得ない。然し乍

ら山の住民が此の名稱を高地に於ける夏季牧場に與へて居る時、アルプスの谿谷を訪れた初期旅行者が彼等から此の名稱を學び粗漏にも此等牧場の上に聳立する巨峰に適用したであらう事は考へられぬでもない。或は又恐らく山の住民自身も其の事柄を訊ねられた時に已達の住家の上に嚴然と臨む眼前の其の巨峰をば單に夏の牧場の延長物に過ぎないといふ風に説明したかも知れない。或は又實際往昔、かの冰雪荒蕪地方の恐るべき増大以前にあつてはその巨峰も牧場の位置に位ひしてゐた事があつたかも知れない。

アルプスの二つの意義の間に於ける混亂はヨリ一般的な言葉たる Berg, alpe, montagne 或は monte 等の場合にあつても同じ事である。アルプスの住民にさつては此の何れもが夏の高地牧場の意味を有する事となり、平原の住民には何れもが高峻なる雪の峰頂を指す事となるのである。

平原の住民に認められた其の言葉の意味——恐らくアルプスの住民が文明度高き隣人の來訪をうけた時に初めて提言されたものであらう——を山人達が次第に採用して行つた經緯を辿り極める事は確かに興味ある事に違ひない。乍併吾々は今此の興味深き横道に外れる事を暫く差し控へやう。唯此處では次の事を述べるのみで満足して置かなければならぬ。即ちはじめ山人にさつて高峰は自然彼等の嫌忌の對象、溪間の貧粗なる原野牧場をば常に脅かす所のもの以外ではなかつたのであるが、時の經過と共に原始的彼等にも漸く恐怖の雪峰が正真正銘の金鑑となり彼等の愛惜措く能はざる牧場よりもヨリ價值あるものである事が判明し來たつ

たのである。何となれば都人士を山間谿谷に惹きつけ、黃金を残して行くのは峰頂であつて牧場ではないからである。

本書に於て意味するアルプスとは歐洲大陸の最も特異なる自然形態を形成する大山脈の謂ひである。大觀すれば此の大山脈は伊太利の北に於て野蠻なる外界より之を保護する一大巨壁或は壘壁を成し、新月形の裡に西は地中海より、東はアドリヤ海に至るまで延々として擴がり、兩側は南に於て伊太利の平原に、北に於て佛蘭西瑞西奧太利のそれに次第に陵夷してゐるのである。

乍併、此の巨壁壘壁も高峻巍峨たる境界を成しては居るが人類植物動物或は風等の決して越ゆべからざるものではなかつたのである。従つて北風——南方アルプスに向つて北方より吹き寄せる寒冷なる大氣の巨塊（風）が壓縮によつて温めらるゝとは云へ一がアルプスを越へても南方の地域は尙此の峭壁によつて氣候の激變からは免れてゐるのである。又此の大山脈を其の兩端に於て迂回する事も困難ではなく且つ又海による事も比較的容易であつた。即ち西に於ては海岸沿ひの古代の道路、ゼノアよりマルセイユに通する今日の所謂蛇腹街道、又東にあつてはバウマーからライバッハを通りゲルツに至るもの等があつたのである。

人類が勇敢になるに從ひ此の巨大な境界は峠（Passe）と稱せらるゝものによつて克服せられて行つた。バスとは嘗て意味した峽溝（Gorge）の謂ひではなく主脈自身の上にある低い顯著な鞍部を指すのである。人により利用せらるゝ峠にも種々の原因よりして推移があり、従つて此の内の數個のものはアルプスに於ける

「歴史的」峠となつた。

初め此等の峠は非常なる困難の許に徒步を以て越へられて居たが其の後此等旅人を慰めるホスピス（僧舎）が峠の頂或は其の附近に建てられる事となつた。次に此等の徒步道は馬道驛馬道と進歩し、尙十八世紀以來驚くべき計畫の許に行はれた「馬車道」を變つて行つたのであつた。現在に於ては又必要以上に困難危險を排除しやうとする第三の時代が到來してゐるのである。即ち之等を迂回或は乘越す代りに其の腹中をトンネルが貫通し、往時旅行者が身を打震るはして喜んだ大美觀 (belles horreurs) をへも現代の旅行者は寢臺の上で樂々と疾過して了ふのである。

次に主脈を貫通するトンネルを擧げる、

- 一、コルドテンダの下のもの
- 二、モンスニ（峠の西十七哩の地點）
- 三、シンプロン
- 四、サンゴタルド
- 五、ホーエタウエルン

此の他峠其のものを乘越して了ふものに

- 一、ブレンナー
- 二、ボンテツバ

等がある。

斯くして此等のものは遂に徒步驛馬道馬車道等を無用の長物たらしめて了ふ。アルプス横斷の交通發達上最も特記すべきはピルン (Pyhrn) 及びホーエ・タウエルン峠を四つのトンネルに依

つて貫きカラヴァンケン及びユーリック (Julie) 山脈を横切り  
ヴィエンナよりトリエストに至る大アルプス線であらう。

抑て次に、興味はあるが餘り明瞭でない動植物のアルプス越へは暫く措くとして吾々はアルプスの住民以外の人間で、ある理由によりアルプスを征服しやうとした人々に限り觀察をして見やう。羅馬の中世乃至は文藝復興時代に拉典文明は伊太利よりアルプスの大山脈を越えて北方に奔入し、外部蠻族に最初の文明の恩澤を與へ次で之等をキリスト教徒たらしめる事となつた。乍併此等は多少とも其の土地々々の政治的侵略を目的としてゐた爲め、武力を行使する事も少くはなかつた。此の蠻族が一度順致され文明化され改宗され終つた頃、今度は逆にアルプスを越へ魅力多き富裕の國土たる伊太利へと侵入する事になつた。或る時は平原の肥土の占領と財寶の侵略の爲めアルプスを横断した。又ある時は、北方の商人がその國産を携へ南方に降り、或は反対に東邦の物資を齎して北の未開地に越へ行く者もあつたらう。又學生が拉典文化の研究を目的に南に此の大山脈を越へるものもあつた。乍併恐らく興味本位といふ近代的風潮がはじまる迄は北方からのアルプス旅行者の大部分はアポツスルの閔或は拉典キリスト教の中心地へと志す凡ゆる階級地位に屬する巡禮者達であつた。吾々は又中世に於ける神聖羅馬帝國皇帝の羅馬にての戴冠式に臨まんとする公の旅行を忘れてはならない。即ち之等多くの旅行者の目的特質が如何なる種類に屬するものであつたにせよ、假令多くの危険缺乏に曝されるとは云へアルプスが越ゆべからざる障壁ではな

いと考へられてゐた事は一般的の事實であつた。「道」は斯くして次第に「旅行者」或は「登攀者」の爲めに開發せられて行つたのであつた。

吾々は今迄アルプスを「全體」として見、且つ一個の單なる大山脈としてのみ觀察して來た。乍併ヨリ深き研究により之が往時發行せられた地圖に見る如く單一の頂稜からのみ成立してゐるのではない事がよく解るのである。

事實此處にも一つの脊稜といふものはある。然し魚類に於けると同様に其處から直角に突き出た多くの横骨、即ち山稜があり、其の間に谿谷及び峽谷の型をなす凹所がある。此等の谿谷は皆中央の脊稜に向ひ且つそれを横切る峠への道を呈供するのである。斯くアルプスの山系は初めて見て考へるよりは餘程複雜なものであり、且つ此の特質は此れを訪れた者の誰もが忽ち把握し得るものなのである。

著者は此のアルプスを直接眼にするまでは斷絶なき一連の山脈なる事を想像してゐた。乍併後に其の詳細を知るに及んで、アルプスを未だ見ぬ一老婦人が其處には三つの巨峰（モンブラン、マツターホルン、及びモンテローザ）のみよりなく、而も各々が海中の島の如く獨立したものと考へ、此の三つの山頂に登つた愛息の安全を確信し、從つて明らかに非常な危険なごゝいふものゝ生ずる事をば微塵だも考へて居らぬのを見て思はず微笑んだ事があつた。

本書に於て吾々は常に在るがまゝのアルプスを對象とする。といふのは今日ある實際の形狀が如何なる營力によつて彫出せられたか、或は又それが組織されたる地質的構成に就ては全然考へず、單に現在の地形其のものに念頭を置くのみである。此等の問題は

其れ自身非常に興味あるものではあるが、元來が自然科學の領域を成るものであつて吾々は茲にそれを論議しやうとするものではない。

然し吾々はアルプスの骨格が疑ひもなく硬軟の岩石よりなり、此等のものが特に高峻なる峰頂を爲す場合には大部分永遠の冰雪、或は氷河に被はれてゐるといふ事實を自覺せざる限り其の眞の姿は之を把握する事は出來ない。

太陽の熱は、特に夏季に於て、此等の雪の幾分かを融かし大河小流の源たらしめる。此等の奔流は谿谷を開鑿した。アルプスの總ての大河 (Drave, Piave) — Inn, Adula, Adige は暫く措く一はその源を此の永遠の雪に發する。即ち (Durance, Isère, Rhone, Aar, Reuss, Rhein, Linth 等は伊太利側とは反對の面に流るゝものであり、Po, Tosa, Ticino, Oglio 等は伊太利斜面を流下するものである。ある時は此等の大河 (又は小流にても) 途中に於てその河床が低地に向つて擴がる地點に小湖を形成する。又多くのものは冰雪地よりの急速なる流下の後、いよいよ平原に移らうとする際非常に大きな湖水を湛へる事がある。ジエネヴァ、ツーン、ブリエンツ、ルツチエルン、コンスタンス、マヂオレ、ルガノ、コモ、イゼオ、ガルダ等の湖は即ち此の例なのである。

此の問題を解決する爲め吾々はまづ「アルプス」なる名稱に對して確然たる意味を與へて置かねばならぬ。第一に吾々は大雑把に云つてかのゼノアからトリエストまで延びアペニーンをカルバティアンの外廓と結合せしめる大山脈の全部を意味せしむべきであらうか。此の場合の限界は西にあつてはゼノア附近のティユーリン及びサヴオナの間にある Col di Cadibona 或は d'Altare (一六二四呎) 東にあつてはヴィンナからアールブルク、ライバッハを経てトリエストに至るゼンメリング峠 (三二一五呎) となる。乍併此の内に包含さるべき地方には雪のない部分、及び如何に變化が存在するとは云へ如何なる雪線にも届かぬ地方が入つて来る。

アルプスの伊太利側より發する之等の大河はゼノア灣或はアドリア海を經て地中海に合してゐる。又アルプスの東邊にある河は幾連かの低丘陵地によつて非常なる轉廻を爲しつゝダニユーブ河に合流する。而して此の非アルプス河川たるダニユーブは反伊太

利側より發するイン河をも合せてゐる。地中海に注ぐローヌ及び黒海に入るダニユーブを除けば反伊太利側より流下するものは皆北海に落ちる。物好きな人の爲めに以上三つの海にその水を送る二つの山頂を示さう。その一つはレオポンティンアルプスの Wyttewassersstock (此の内の低い方の峰、九九二二呎) で之は地中海、アドリア海、北海の水薦を増し、他一つはマロヤ峠の西北にある Pizzo Lungino (九一二一呎) で其の流れはアドリア、北海、黒海に落ちて行く。

最も一般的に承認されてゐる意味での「アルプス」なる概念は右の記述によつて明らかにせられた。所で吾々は次に簡単に其の限界を定め、一方アペニーン山脈と他方ハンガリーの國境に向ふ丘陵地帯とを區別する必要がある。

揃てアルプス研究の權威たるかの John Ball は遙か以前に何等

特別の言葉を用ひずアルプスとは其の性質に於てアルプス的であり、その高さが永遠の雪の巨塊を保持するに足る部分を謂ふと指摘してゐるのである。之を要するに「アルプス」とは、勿論總ての山頂が雪を被つてゐる譯ではない。最も高い山頂に於ても雪のない事がある。又支脈中の比較的中位の高度に於ても多量の雪を持つてゐる場合が往々にしてある。が此等を一括して右の大山脈に於る雪ある高峻なる地域をば意味するのである。即ち此の定義に従ふとすれば其の限界は西方に於ては Cuneo からヴァエンティミリア或はもつと迂廻して二つのヨリ低い峠を越してニースに至る Col de Tenda (六一四五呎) となり、東方は昔から多くの者に通過されてゐたエンス渓谷からムール渓谷へ越へるラートシュテツテルタウエルン (五七〇二呎) のルートであつて之は次でカツチュベルグ (五三八四呎) を経てドラーゲ渓谷迄延びてゐる。北の方面に於ける主たる通路はヴィエンナからリンツを経てエンツ渓谷のリエッエンに至るビルンバス (三一〇〇呎) か、ザルツブルクから直接 Lueg 峠谷を通つて行くものである。然しラートシュテツテルタウエルンから南に Predil 或はボンテバ峠に至る自然的の延長線はアルプスから總ての東南山群を排除する事となる。仍で吾々はドラーゲ渓谷の Villach から東へ、又東南へ即ち、クラーゲンフルトを経てドラーゲ渓谷を下りマールブルグに至り次でゼンメリング鐵道の末端を戻り Cilli ライバツハを通つてトリエストに終る部分を除いて了ふ結果となる譯である。揃て茲に於て吾々は本章の頭初に考へた問題に對する解答を約

說する事にしやう。即ち「アルプス」とは伊太利を其の外部の世界から被護し多くの峠によつて横断せられてゐる大山脈の中につてヨリ高い雪ある部分を意味するのであるが之を詳記すれば次の如くなる。

即ち Col di Tenda 及び Radstädter Tauern によつて夫々西、東を限られ一つの主たる分水嶺と其の主脈を同じく融雪によつて生じた奔流（其の多くは平原に達し海に入る以前大湖を形成する）を含む渓谷を持つ側稜を派生してゐる半孤立的の山群とからなり立つてゐるものなのである。

（以上）

### 今度出す「針葉樹」のことから 林俊介

私達は今秋又針葉樹を出すことに致しました。去年の六月から、今年の八月までの記録を含んで居ます。内容も以前と同じく紀文雜記、山小舎、記録に分けられます。然しこの外に亡くなられた部員宮川君のために追悼の欄を設ける豫定であります。詳しく申せば、紀文には鹿島槍東北面、及飯豊山の比較的まとまつたものと、會員吉澤氏の玉稿マツター・ホルンに關したものが一つ掲せられます。雜記には錫杖岳、北岳バットレス、團衛谷、秩父三題など現役のものと、やはり會員にもお願ひ申しまして磯野氏に故中島氏のこと及宗作のこと、又堀岡氏にも何か書いて戴くことになります。この外の會員の方々にも御願ひ申し上げましたが、不幸にも御多忙と見えて玉稿を得られそうもないのは部員一同の

非常に殘念に思つてゐる所で御座います。山小舎欄は現役は必ず一行以上書く覺悟をしてゐます。會員にも是非共舊年に勝る名文を續々御投稿あらんことを一同より御願ひ申し上げます。記録はありあまる程あります。例年の如く分類して掲せる積りであります。最後に寫眞は良さそうなものを總て引伸して見てその中から十面程を選ぶ豫定であります。

× × × × ×

近頃私達は今迄の針葉樹が或る點から見て統一といふものを持つてゐないといふことに氣が付きました。これは次に述べます登山の歴史的發展から當然なことでありまして、決して會員方より私達が進んでゐるご申すのではありません。日本も最近まで山嶽に關しては暗黒時代でした。内地の山々に登山の曙光が指し始めた時代には征服す可き山頂は無數にあり、又それに續いて岩登り冬季登山等の進んだ登山技術の紹介はいやが上にもその征服慾をあふりたてました。その時代には登山することそれ自體が登山の目的であり、征服から受け得られる歡喜は決してそれ以上のものを要求しなかつたのでした。かくて私達の敬愛する會員諸氏は所がまはず登り廻られたのでした。その時代には記録は唯發表するこことだけで充分の價値が認められました。何處の山でも宜い、何んな澤でも良かつたのでした。記録をざつさりと掲せることだけで針葉樹の價値を増すことの出来る幸福な時代でした。併し次の時代には登山記録の發表の價値は明かに減じて來ました。さ同時に登山といふことを初めて考へる様になつて來た様に思はれま

す。漂泊と登山との區別に苦しみがあつたのではないでせうか。かくて登山論は部室に汪溢し、山に行くのも忘れて理論が戦はされたのだと思ひます。この邊非常に大膽な論斷ではあります。私はこれが一面の傾向であつたらうと信じます。次の堀岡氏達から最近までの時代はその理論時代に對する強い反動の時代、即ち理論の解決を山に求めて、部室で議論ばかりしてゐてもしようがない、もう一度山へうんと行つてみよう、そゝしてから又考へようぢやないか、と言つた様な、唯山へがむしやらに入ることを目的とした時代であつたと言ひたいのです。實際一昨年から今年へかけての部員の山行きは實に美事なものでした。その結果いつの間にか先の問題は片付いてしまひました。漂泊者と登山者との區別を問題にする人はなくなりました。併し問題は尙殘されてゐました。即ち登山とは何ぞ、登山者とは何ぞ、登山の進歩とは何ぞ、と言つた様な問題がこれであります。

× × × × ×

私達はこゝに到つてハタと行詰りました。そして互に議論し、本を読み、又山に入つて考へました。併し今度はそう簡単に解決せられませんでした。其處で私達は考へまして、丁度出そうとしてゐる針葉樹第八號の編輯に當つて、この問題を皆で考へながらやつて見ようと言ふことになりました。非常に自分達の實力を悟らない向ふ見ずな企てであります。然し乍ら私達は針葉樹第八號に於てこの問題を解決してしまはふと言ふのではありません。私達の今心に思つてゐる事を出来るだけ全部さらけ出して——勿論直

接にそれを論する積りは毛頭ありません。私達はそれを編輯方法なり、紀行文なりを通じて間接的に表現しようと言ふのです——言はゞ問題を漠然とでも宜いから出来るだけ、部員會員そして多くの登山者の前にさらけ出して、もう一度今度は皆で一緒に考へてみようと言ふのです。或ひは一部だけしか表現出来ないかも知れません。又は全然發表出來ずに終るかも知れません。非常に身の程も知らぬ、冒險的な企てであるかも知れません。併し私達はあくまでお互に助け合つてこの問題の解決に努力して行きたいと思つてゐます。

× × × × ×

私は次に私達がこんな大それた考へを抱くに至つた動機の二三を述べて見ます。これは豫科に新しく部室が出来たとき、本科から四五人おしかけて駄辯つた時に出たものです。その中で最も單的にこの問題にふれてゐるものに次の様なものがあります。それは、「若し穗高を樂に歩き廻つてゐるものが秩父へ行つたとしたらその人の後の登山を以て進歩したものと言へるだらうか。何故だか分らないが言へると言ふのであります。その意味付けこそ私達の苦しんでゐる問題なのです。實際的な名を用ひては或ひはこの意味を充分に傳えられないことを恐れまして、前の言葉を言ひ換へますれば、若し一登山者が或る山頂へ——同一でも別のでもかまひません——以前よりもつと餘裕を以て登り得た場合、後の登山の方が先の登山よりも進歩してゐるのでせうか、マンメリーに言はしむれば——私自身はマンメリー自身の登山精

神の研究を未だ少しもしてありませんので或ひは誤解かも知れませんが——兎に角後者の餘裕ある登山は前者より退歩した登山であると言ふのではないでせうか。けだし登山者は常により困難なルートを求める可きであるといふ彼の主張から推して明かであります。こゝに私達の到達したデレンマがあり苦しみがあるのであります。

次に、大體の人は奥多摩から秩父、秩父からアルプスへと言ふ具合に、抽象して申せば、より困難を増す山へと向つて行きます。これは明らかに一登山者としては初歩ではありますけれども、明らかに登山者として進歩の道を辿つてゐるものであります。然し或る時期に於て、かかる登山者にもそれ以前と同様な進歩發展が全く望み得られない行詰りの時期が早晚来ると思ひます。そのときは其處で彼の登山者としての進歩は終つてしまふのでせうか。勿論登山技術の進歩は幾分かは彼の行詰りの時期を遅くするに役立つかも知れません。然しそれ以上の何者でもないと言じられます。

私達はマンメリー主義、ヒマラヤ主義——充分に理解してゐませんけれども——で以て満足が得られません。さうかと言つて徯徊主義も採れません。唯こんなことを考へてゐます。宗教的な登山は別として、登山のための登山のみを考へますときに、日本が歐洲と交渉を持つ前に日本には漂泊の旅といふものがありました。勿論その対象は自然の總てでありまして、山も海も平地も含まれてゐました。自然の寂びに喜びを感じると言ふ純日本的なものでした。其處へ歐洲的な登山術の紹介と共に種々の歐洲的な登山精

神といふものが傳へられました。マンメリーア主義、ヒマラヤ主義はその中で最も色彩の強いものでした。そして之らの新しく外から入つて來た主義は殆ど日本の登山者達を風靡してしまひました。私達の第一期理論時代は丁度これら新しい主義と純日本的な漂泊者が未だ充分な勢力を以て互に争つてゐた時代なのではなかつたでせうか。その結果は一先づ古い主義は影をひそめ、現在に於ては全く日本人的な所のない主張をする人さへあります。併し乍ら多くの人達の心の中に尙それで満足できない何等かのものがあります。充分に覺醒した登山者の心の中には今尙満し切れない不安がひそんでゐます。私達はそれを純日本的な漂泊の心(きらら)が日本人たるその登山者的心に反動的に醒りつゝあるからだと思ひます。併し乍ら私達はその純日本的なものが復活して新しく日本の登山者をリードする登山主義となるか、或ひは又その純日本的なものと、其後取り入れられた歐洲的な登山主義との二つから止揚されて、再び新しい日本的な登山主義——日本人を満足させることの出来る登山主義となるのか分りません。而し私達はこの邊を考へますとき、非常に私達の問題の中心に近付いてゐる様な氣もします。

或る先輩は言はれました。「アルパインクラブと日本山岳會とは會員の質が全く異なる。彼等が登山することのみを目的とするこの出来る幸福な人達であるに反して、日本では仕事しつゝその上登山する人々である」と言はれます。「そのために私達の今考へてゐる様な問題はアルパインクラブの連中は恐らく考へない問題であり、日本人の力による外はないのだ」。と主張されます。

全くそうであると思ひます。多くの日本人が仕事をもちつゝ尙山に行くとき起る問題なのです。登山と生活のこの二つを考へるときに始めて心に浮び上る苦しみだと思います。例へばこんなことが言へるでせう。或登山者——過去に於て相當に登山をなした人が何等かの理由で——金の都合がつかなくて、足を折つて、山に行けなくなつたとき、第三者は彼の登山者としての生命は終つたと言ふかも知れません。追憶はあるかも知れません。併し彼の登山者としての進歩は最早望めないのでせうか。登山者としての生命はその時で終つてしまふのでせうか。私は絶対にそうでないことを信じます。何故か。私達の問題が即ちこれなのです。私達はその意味付けが分らないで苦しんでゐるのでです。

山に行きたいから山に行く、それで満足してゐる人をより幸福であるときへ思ひます。併し乍らそれらの人々が恐らく、も少し山へ入るごそれだけでは満足できなくなると思ひます。その時一つでも疑問を抱くことができたら非常な進歩だと思ひます。そして二つ三つと疑問が増して行くのが明かにその人は登山者として進歩しつゝあると言へそうに思はれます。總ての疑問が提示せられた時に、其處に進展が起り飛躍が見出される信じます。苦しんで苦しんで苦しみぬいてゐる中に自づと解決の曙光が見出されるものと信じてゐます。

今迄非常に抽象的なことばかり申して參りました。併しこれは又全く現實の問題に結び付いて來るのでです。一つの計画をたてる

さき、一日でも山に入るさき、私達は常にその登山をしてそれより前の私達の登山より進んだものであらしめたいのです。登山者も人間である限り一回一回の登高すべてに進歩あらしめるこことは不可能であるかも知れません。併し絶えず努力して進歩あらしめることに勉めなければならぬと信じます。穂高も、縦走路を行くより奥又白を登る方が進歩した登山であるかも知れません。而し登山技術の上から見てのみ言へることであります。その人の登山の上から判断して何れなりとすることは結局、私達が今苦しんでゐる問題が解決できて後に、判然となし得られるこことです。そして又この問題が解決せられた曉には、これで以て部の統制も出来ると思ひます。家を出かける充分な理由にもなると思ひます。理論的には非常に宙に浮いてゐますが、實際問題を常に密接な關聯を持つた問題であります。

× × × × ×

私達は最近まで私達より二三年前の理論時代に對する強い反動の時代、即ちもう一度山へうんと行つて考へようと言つて山へむやみやたらに向つて行つた時代にありました。そして私達は私達より少し先の先輩方の考へられた問題はいつか解決せられてゐるのに気がつきました。私達は一つの峰の頂きに立つことは出来たのです。而しそれから次の山の麓までは深い針葉樹林があります。私達は今その林の中に足を踏み入れて登り口が良く分らないで苦しんでゐるのです。私達の目前に尚ほ未だ大きな山が——大きな問題が残されてゐるのです。そして道が——問題の中心に入る糸

口が分らないで苦しんでゐるのです。私達は氣強いことに今迄の様に一人でないことです。部員が皆で手分けしてその山への登り口を探してゐるのです。皆んなが心を合せて助け合つて行けばその糸口は見つかりそうです。それで登る前に一先づその山——その問題に對して抱く考へを充分に語り合はうとしてゐるのです。そしてそれを書き記すものとして今度の針葉樹の八號をえらんだのです。私が僭越にも今度の八號を意識的に或る統一を以て編輯してあると申しましたのはこの意味合ひのものであります。即ち私達がお互に同じ問題に苦しんでゐる。その苦しんでゐることを意識的に針葉樹を通して發表しようと言ふのです。

私達は今私達が直面してゐる山が最後のものは思つております。私達は是非共登らねばならぬ山だと信じます。そして登る途中、登る前に皆で書いた針葉樹を休む毎に取り出して讀もうと言ふのです。何とか役に立つかも知れないと思つてゐるのです。私達は協力してゐます。併し乍ら何と言つても未だ全く微力なものであります。賢明なる會員諸氏の中には既に私達より先へその山の頂へ立たれた方もあると思ひます。山の上から何とかして私達の進む道を教へて下さい。そして一二町先に居られる方は大聲で私達を呼んで下さい。きっと早くそして樂に私達は峰に立てると思ひますから。私達はその峰の頂から、その先に連る山脈を一刻も早く見たいと望んでゐるのでござります。

× × × × ×

私は今回の杉村助教授の問題から、自分ながら意外に思ふ程學

生運動の中心深く飛びこみました。其の結果、私が今迄知らなかつた世界があることに氣が付きました。私はかつて私と他人との關係で苦しんだことがありました。併しそれは、どうやら打開することができました。然し乍ら今度の問題は自分と社會、一橋を通して自己と世界との關聯、言ひかへますれば生活といふことになると思ひます。そしてそれが意外にも苦しんでゐたこの登山の問題とも結び合つてゐることに氣付きました。即ち私は生活と登山との關聯の問題、調和の問題であると思ひます。登山者としての進展が學生々活の終焉と共に中絶さる可きものであるかと言ふのです。私はしましては死ぬるまで私の登山に進歩あらしめたいのです。

私にしましても現役の連中にしましても未だ問題の廻りをまはつてゐるだけでその入口を見出しが出來ません。その爲め問題そのものをさへ明示することが出來ないです。私は現在の混沌たる状態をその儘會員諸賢の前にありのまゝ表現して、その御高教を待ちたいのです。會員諸氏よ。宜しく私達の意を察して御指導下さらんことを御願ひ申し上げます。又隨分向ふ見ずな誤った判断もしてゐると思ひます。是非共充分の御叱正を得たく望んでおります。私は唯今から總退學の運動に加る可く國立へ参ります。その前に杉村助教授の問題の論文を読みたいと思つて開いて見ました。その最後の一旬が私の心を惹きました。「吾々が今日の問題を考へるに當つても、先づ以て來る可き時代の兆候を探らなくてはならないであらう。それをたゞ經濟的なるものゝ中に見出さむことは許されない。世界に動きつゝある文化の全般に渡

つてひろく深く洞察しなくてはならない。」と。私は經濟的と言ふ言葉を登山的といふ言葉を入れ替へてもう一度この私達の問題を考へて見たく思つてゐます。

(一〇・九・二二)

## 富士山文献解題（五）

増山清太郎

吉澤一郎氏から御注意があり、獨塊山岳會第六十五回年報（一九三四年）に、テオドール、フォン、レルヒが、「スキニ依る富士山初攀」を寄稿してゐるのを知つた。屢々獨逸語を離れてゐたら、どうもツノばかり目立つて読みにくいか、バラ／＼と頁をめくつて見た所では、一人の友人と共に一九一二年（明治四十五年）五月に、御殿場から登つたらしい。従つて冬期登山といへるかどうか疑問であるが、前號に、富士登山にスキーを用ひたのは大正二年一月の、高田聯隊の將校であると述べたのは、茲に訂正せねばならない。尙レルヒ氏は登行記のみでなく、傳説詩歌等にも及んでゐる。

吉澤氏が毎晩日本山岳會の圖書室に通つて、翻譯して居られるのは誠に感謝に耐えない。いづれ本誌に御發表下さるよし。

小生別に明治前期登山史を纏めかけてゐる。そして日本に於ける近代的登山（近代といふ言葉は適當でないかも知れないが）の創始を、一八六〇年（萬延元年）九月に、ラサフオード、オールコックが富士山に登つた時に求めやうとしてゐる。野中至よりも先に冬期登山を試みた外人のある事は、既に述べた。かうして

みる。日本登山史と富士山と外人は切つても切れぬ縁がある。近來登山史の研究が散見するのは誠に結構であるが、どうも富士山は特別扱で、敬遠されてゐる。また氣持の上で相當に我々と掛離れた弘法大師だの、役行者だの、せいぐ降つて仁井田好古、荻生徳祖あたりが活躍してゐるのは、少々軌道を外れた觀がある。明治時代の在留外人の活動が、登山界に於ても、他の部面と等しく新舊時代の連鎖をなすのではあるまいか。そして新しい登山の傾向は、まづ富士山に表れるやうに思はれる。富士山と外人を登山史上に導出すことが、その研究を常道に戻す手續の主たるものであると信じてゐる。

### 大門峠、車山へ

ト  
ン  
ア  
ン

去年の初夏、蓼科へ苦行した時頂上から眺めた霧ヶ峰の宏莫たる平原へ「ハイキング」とやらを試みやうと十三日の夜トッサンと新宿を立つ。最近鐵道省に繰られてワンサと出かける霧ヶ峰だ、餘り早く諏訪へ下つても仕方がないからと十時半發を見送つた處が、茅野へ着いて見る前なら直ぐに自動車が連絡したが今度は少し間があると二時間近く待たされて、八時頃やつと車上の人となる。おまけに二人共良い氣持に眠つて瀧ノ湯近くまで運ばれてしまひ、田舎の女車掌の氣の利かなさをかこちながら湯川迄一時間ばかりバックを餘儀なくさせられた。大門街道は峠の上までつてしまだらく登りで、此の邊の者は自轉車で越してゐる。一五四二

米の附近に發電所の殘骸があるが、此の邊から見た八ヶ岳の裾野の線は實に雄大である。峠の上は何處が頂上と言ふ事はなく霧ヶ峰の草ツ原の續きと言つた感じがする。取付にスキー小舍があり其處から西へ草の斜面を登るのだが、地圖の峠は未だ十丁近く先らしい。道は判然としないが草は丁度靴が隠れる程度で歩き良い。小突起の間を通り郡界に沿つて車山の下に出たが、見渡す限り樹木のない緩斜面で、グライダーを飛ばすには成程好適だらうと感心した。車山の下にも小舎がある。見れば頂上には霧が巻いて居り、峠の登りで照りつけられてへバつてゐるので敬遠したかつたが、餘りサボるゝ寝覚が悪からうと思ひ直し、卅分程ブツシユを漕いで上に出る。

この日、天候晴朗なれども、時々霧がかゝるのが玉に疵で車山の好眺望も長續きしない。空也の最中と熱い番茶で氣をよくしてから、足にまかせてかけ下りてしまつたがのつべりとしてゐる上に時々霧がかゝるので、まるで方向が解らない。下れば下る程にだゞつ廣くなつてしまひ始末に悪い。いやに廣い癖に小さな起伏が澤山あるので何時の間にか天然記念物高原濕原に這入り込んでしまつた。自然科學とは餘り縁のない頭の所有者二人には天然記念物も別に難有くもない。

霧ヶ峰のヒュッテかと思ひ違ひをしてゐた八島池の小舎はきたならしい。そのくせ嚴重に戸締りがしてあつて不愉快だ。(だからと云つて何も僕は小舎荒しの常習犯ぢやないから一應ことはつておく) こゝから太平へ下り萩倉より和田峠からの中山道に出

る。この谷は一向に面白みのない所だつた。只萩倉の高い部落から見おろした中仙道は一寸いゝ。長谷川伸のまた、び物を思ひ出してゐたらモウくたるほこりを上げながらトランクが和田峠の方から驀進して來てあたら小生の詩的イリュウジヨンをぶちこはしてしまつた。

乗合の時間が具合悪く歩いて下諏訪まで約三十分。  
丁度お盆の休で工女達が涼しきうな浴衣姿で宵の町をゾロゾロしてゐる。

上諏訪迄バス。ここで湖上の明月をたのしみつゝ湯上り後の氣持よい夕食。

十二時過の汽車まで二時間はわられる。アン氏得意の駄眠をむさぼる。一人ゐて一人がよく眠る事不思議に一人はねむれない。小生盛にせめよせて來る蚊をおいながら彼の枕頭にはんべる。仲々に起きさうにもない彼をたゞ起して漸く上り一番に間に合つた。揃汽車の中では僕はよくねむれた。彼は少しもねむれなかつたと云ふが別に證人があつたから解らん。

### 鹿馬澤のこと (ケン坊)

最初に断つて置かねばならないけれども、馬鹿澤と言ふのは、上高地の美しいペイサージュを織りなしてゐる諸々の山々の中の、ある山のさる澤を僕等四人でつめて行つた時に、偶然のことからその澤に對して與えた名稱であると言ふことである。玄文澤

の邊、そして前穂明神の峭立する姿を、美しい梓川の流れと共に忘れるこその出來ない私は、白樺の幹の間から眺め得る霞澤岳の、一見異様な姿をも忘れることが出來ない。その霞澤岳は梓川のほそりへと崩れ落ちる一つの澤を持つてゐる。馬鹿澤と僕等が名付けたのは、實にこの澤だつた。

その澤の名前は參謀本部の地圖にも出て居ないし、又誰も是と言ふ人も居ない。恐らく名前の無い澤なんだらう。梓川のほそりに立つて朝霧の急速に去來する霞澤岳を眺める時、先づ目に付くのは三本槍の勁い容姿と、この澤のガレ落ちてゐる姿である。北面のため、この澤にはまだ雪が残り、かなり上方には雪渓すら見えてゐた。そして夕方清水屋の風呂に入るごとに硝子越しにこの澤は又一段と美しく眺めることが出来、天幕から這出て一日の山行には相應しい澤らしいと言ふことを、静かな湯氣の立ち上る湯槽の中で、想はせてくれるのであつた。で、こんな憧れを寄せた、この霞澤岳の澤に、何故に僕等が馬鹿澤などと言ふ名前を付けてしまつたか、その顛末はこうなんである。

連日降り續いた雨が、その日はバツタリと止んで、珍らしく晴れた一日、何なしにこの澤と、三本槍に心を惹かれてゐた連中が、今日は惠まれたぞとばかり天幕を這出した。パーティは四人(K・アンコウ・入道・ケン坊)、上高地ホテルを通つて澤の入口に着いたのは午前九時頃だつた。入口は倒木と石ころばかりで踏跡もない。コン畜生と思つて登つて行くと雪渓に出る。これを過ぎるとさ澤は二つに別れ、下を眺めるごと、上高地ホテルの赤い屋根が

針葉樹に圍まれたまゝ、直ぐ目下に見え、梓川の清流の音はもう全く聞えない。

最初僕等は右の澤をつめた。少し登るごと石ころだらけの河原然たら澤となり、然も眼前には岩壁が連續して突立つてゐるのに氣が付いた。岐澤は何處にもない。止もなく引返して左の澤をつめ出したが、四人が何ごなしに面白からぬ氣持になつたのは、此の頃だつた。こんな澤かい、こんな澤を登つた所で面白くないぢやないか、と云つた氣持が顔に現はれ出して來た。兎に角左の澤をつめて行つたが、落石が馬鹿に多かつた。長く續いた雨の後だから、ガレは輪をかけてよく崩れる。その中に岩場が出て來たので皆氣を取り直して登つて行つたものゝ、岩は堅いがスケールが小さすぎて面白くない。枯枝や泥が雪渓を穢く汚す。そして心細い様な小便瀧をまごとに登つたり、腐つた様な雪渓を登つたりするんだから、浴槽の中の美しい幻想とは、似ても似つかない心憎い澤となつてしまつた。急峻な澤を、ガランゴロンと赤茶けた白い石が、土と一緒に落ちて行く。一歩進むごとくざ崩れる足場はいらしくして、おまけに心細い。やがて瀧に出た。

此の瀧の右側は岩、左側は灌木の生えてゐる急な崖で、小さい岩が下に在る。で右側を捲くこにしたが、水沫に濡れてゐるのでホールドが善くない。止もなく左側を登ることにした。此の崖が又よく崩れる。ホールドにする岩が、土から根こそぎに抜けて薄氣味悪く崩れ、果てはカラシカラシと下方へ落ちて行くんだから、人々登る他なかつた。

此處を通り越すとガレは、今迄以上にひどい。一足ごとに落石があるんだから、後から行く奴は氣が氣でない。時には泥と一緒にズブリと踏込む下が雪渓だつたり、完全に大丈夫と思ふ大きな石が、ガクンと顔を素向けてヒヤリとさせたりする。傾斜は相當ひどくなつて來た。元氣は馬鹿に好い。

もう意地張りで登る様なものだつた。歸つてしまひ度ひのだが言ひ出すのが癪なんだらう、皆の氣持が一所に集つて居乍らお互に黙つてモソくと登るのだつた。やがてガレで造つた様なチムニー(?)みたいな場所に來る。此處迄來るごと三本槍らしい岩があつちにもこつちにも見えてゐる。意地は張り通せで、このチムニーミたいな所を登るんであつたが、こゝの足場の悪いのには全く恐れ入る外はなかつた。登るんだか、下るんだか、當人は登る心算なんだけれども、下つてゐる様なもので、大して進まない。絶えることなき落石の中に、ガレ續きの此の澤を、モソモソと集つて登つて行く四人の姿は、かくて情なさを通り越した。哀れさをも交えてゐる。下を見れば澤は切立つて來てゐるのに氣が付いた。そして先刻捲いた瀧の上あたりから、枝ぶりの好い松が、ギューと空間を横に切つて突ん出てゐる。満更捨てた景色ではないと言つて褒める氣には更になれない。こんな澤だと覺悟して來れば好かつたのに、そんな心構えは毛頭なかつたのだから、もう四人は腐り切つてしまつた。それでも三本槍は程近い、と言ふので一脈の望みを持つて、又モソくと登り出した。

やがて此處を登りつめると、灌木が見えて來た。三本槍と思は

れる岩は、荒涼たる姿をして、ガレの上に突立つてゐる。がこの灌木の生えてゐる草地に登るには、前にある妙な岩を越さなければならなかつた。此奴が難物で、手をかけると崩れる、足をかけると又崩れる。それが今迄登つたチムニーの間を、ビューンと音を立て乍ら、果てはカラランカラランと落ちて行く。音だけで澤山だ。下に居る奴は、岩かけにヘバリ付いてゐる。

やつとこさで上の草地に着いたけれども、こゝは草と土と石が一緒にすべる。右にすべるとき先刻のチムニー、左にすべればガレ澤が口を開けてゐる。だがもう尾根に出てゐるんだ。一休みと腰を下した。ジツヘルしてゐるんだが、ホツケの姿勢をしてゐるんだか、いづれにしても好い格好ぢやない。草の上とは名ばかり、尻の安定は情ない位だ。

皮肉にも焼ケの奴は、晴天の下にクツキリとして浮き出でてゐる。つめて來た澤は、深く切立つた兩側の尾根に擁せられて、小瘤な曲折を見せ乍ら、その眞中に妙に冴えた焼ケ岳を眺めさせてゐる。久々の晴れた日、選りに選つて來たのが、このガレ登り——清水屋の風呂の中で、好い氣持になつて書いた像は、さつくの昔に吹き消されてゐる。もう一時を過ぎてゐたらう。登る登らないの議論が、ホツケ姿の四人の間で行はれたが、その時

——だけどれ、こんな澤をつめたつて面白くない。面白くないことは判り切つてゐんだ。降りるに越したことはないよ。俺はもう御免だ！

と云ふのが決定的な言葉になつてしまつた。三本槍に登らないの

は瘤だが、此の澤に對するムカムカした瘤の方が、餘程大きかつた。四人は全く寂しく(?)、又ガレを下り始めたのだった。

容赦することなく、湧出る様にガレる澤を下つて、登る時苦心した瀧の所に着いたのは二時を過ぎてゐた。瀧壺の側に腰を据えて、一休みするごとに緊張が弛む。そして腹の減つたことに気が付いた。食慾を満足させて(この時入道が持參せるアスパラの美味きこき)、ヒヤリとする冷氣を脊に、チエリーの煙が立登る頃、誰とはなしに今迄の瘤な登行を悪口し始めた。それにこの瀧の側は周圍を全く岩で囲まれてゐる、薄暗い場所で、西南に西穂から来る尾根々々を眺め得る、涼しい憩場。暑い夏の陽光も、こゝでは全く遮られ、遠く入道雲を眺めてゐるごと、肌寒くなる。悪口を言ふには好い場所だつた。

——こゝらで止めて晝飯を喰つて歸つた方が、賢明の策ぢやつたよ。

——折角の晴れた日が、ガレ登り、四人這ひか。うまく出來てる。——あんな雨の後、澤登りをやらうなんて言ふ奴が悪いんだよ。

因業な奴だ。

さ腰を据えたまゝ、四人はもじかしかつたこの日の山行に、不平を洩らし乍ら、次第くに元氣づいて行つた。その時

——何ちゅうこつたい、この馬鹿澤は！

さ、全く偶然に馬鹿澤と言ふ言葉を口にした者がゐた。此の馬鹿澤と云ふ言葉は、今迄の僕達が、この澤に對して持つてゐた不快な、そして裏切られた様な、もじかしい氣持を十二分に表現して

尙餘りあるものだつた。そまさ、馬鹿澤だよ、馬鹿澤に相違ないんだ、と四人は共に目を見合せて大笑をしてしまつた。このために、霞澤岳の美しく見えた一つの澤は、僕等にこつては、全く馬鹿澤としか名の付けやうのない印象を残してしまつたのである。

一時に心快くも晴らされた鬱憤が、この夏の日の霞澤岳の冷い岩々の下で、静かに立登つてしまつた時、四人は又ガレ落ちる馬鹿澤を、笑ひ乍ら降つたのだつた。上高地に着いたのは四時前後、天幕の中へ、役に立たなかつたザイルを置いて、清水屋の風呂に向つた。

風呂場の中へ、硝子越しに差込む陽光が、既に夕方の來るを知らせてゐる頃、四人は温泉の湧き出る中で、又窓硝子越しに霞澤岳を眺めてゐた。アレだ、アレが馬鹿澤だ、と指呼する時、ガレを露骨に見せて大口を開いた馬鹿澤は、相も變らずに好く見える。その時たつた今迄の山行の想出が、湯槽の中から立上る湯氣と共に、全く憎めない、愛すべきものとして感じられて來たのだつた。そうして今迄の不快な印象ばかりしか無かつた馬鹿澤と言ふ澤は妙になつかしい、親しめることが出来る澤の様に思はれてならなかつた。夕方に近づくにつれて、次第に光彩を変え、聲もなく聳り立つ馬鹿澤、そして山上には夕雲が久方の茜色をして去來するその姿には、確かに、汲んでも盡きない山靈の神祕が宿つてゐた。こうしてゐるご、もう霞澤岳も、そのガレの澤も、やはり僕等の愛する山々の一として、忘れることが出来ない、懐しいものとなつてしまつた。

(一九三五・八・廿一)

### 松田アナ君山男に非らざるの件 (クマ)

もう一ヶ月位前になるかと思ふ。何氣なしに七時からはじまるニュースの放送を聞いてゐた所が、最後になつて東京營林署が何處かで山嶺道路を開く事になりましたといふ聲が朗らかにスピードを流れ出して來た。はて多少俺に關係があるなと思つて耳を立てる。

「高尾山? の裏山からサントウザン……之はどう讀むかわかりませんので假にサントウザンと呼んで置きます……此の三頭山へかけて近時近郊山岳の跋涉流行に伴ひ之が便宜に供する爲め切掛けをつける事となりました……一寸お待ち下さい、サントウザンはカワノリヤマと讀むのだ相であります。カワノリヤマで御座ります。失禮致しました。」

カワノリヤマか! どちらが失禮したんだか知らぬがさう読みますかねと感心してゐるご、又間もなく

「只今のは矢張りわかりませんのでサントウザンと訂正して置きます。誠に失禮致しました。」

(一〇・一〇・六)

### スキーの思出

中島 幸

始めて兄貴に燕温泉へつれられて行つたのは昭和五年の春であつた。關山村のはづれからスキーを附けて登つた時の苦心は一方ではなかつたことはさて置き、廣大な妙高山麓のゆるいスロープ

が白銀に包まれ、南國人の想像も及ばぬ大自然の作り出した姿は永久に忘れられぬ第一印象であった。それ以来、十二月になつてそろ／＼寒くなり出すと第一に頭にひらめくものはスキーであり無精に愛着を感じる様になつた。そして長幼、富貴貧賤の別なく俗念も煩悶もなく滑つてゐる人々の姿は堪らない憧れの的であつた。始めてゲレンデに立つた時『あれ程滑れゝばいゝなあ』自分でスキーをつけてゐながら二本の杖にもたれて人の滑るのをほんやり見てゐた。滑つて見ようと思つたゞけでもすぐ轉び、起きては轉ぶ。ひたすら努力あるのみだ。次第に安定が出来て少し位の凸凹も轉ばずに頑張れたり、少し曲れる様になつた時大聲で叫びたい様な衝動をもつて溢れる嬉びは、スキーならずば味ひ得られぬ眞の嬉びであらう。

燕温泉に滞在してスキーを自己流でやつたのはたつた五日間であつたが東京に歸つて來てもスキーの夢ばかり見た。座敷でもスキーをはいたりした。翌年始めて山岳部の合宿に行つてテクニックを習ひ、シユナイダー氏を見たりしてやつと少しほは滑れる様になつた。

初心者らしい人が變な格構で起きては轉び／＼してゐる姿を見る可笑しいよりは寧ろ尊いものを感する。一日中滑つて入日がほんのり白銀の山々を染める頃。スキーを肩に歌ふ冬の讃美、疲れ等は忘れてしまふ。

今學校を卒業して社會に出ようとしてゐる時、この樂しみは少なからず制限せられる事を考へるゝ淋しいがO・Bには又特有の

愉快さがあることを信じてゐる。針葉樹會諸氏よ、今後宜しく御指導下さい。例へ東京に居なくとも大阪なら信州のスキー場でお會ひ出来るることは容易でせう。

最後に在學中一方ならぬ御厚情を辱ふし下さつた皆様及びスキーを専心お教へ下さつた堀岡君に感謝します。

## 上高地の或る夜の事

スケ

湯あがりの頬を冷い穗高風しに心地よくなぶらせ乍ら、SとTとXはまるで上高地ゴロみたいな格好でノソリ／＼と彼等のキヤムブホテルへ歸つて行く。不圖覗くと晝をあざむく電燈がコーケーと光る或る賣店の中、一人の可憐な少女がセンチな表情でさしうつむいて居る。『おい菓子買って歸らう』『よからう』といふに應じたのはTらしい。三人暫く無言で店内をジロ／＼。『君イー、これ額様だけだといくらだい』『……』『この鉛筆心があるかい』『……』『こん中で一番安くてうまい菓子ござれだい。え、君イー』『……』おもしろくないのでXが『オイ、カリントにしやうぜ。一番美味くて一番安いのはこれに限るぞ。ねえどうだる君イー』すると彼女、いとも面倒臭さうにうなづいて『いくら上げようか』可愛らしい顔に似合はず鐵火な口調に三人共やゝ驚いたらしいが兎も角一言でも聲が洩れるこ何だか嬉しさうに慌てた調子で、『君イー、いつも買ふんだから七錢にしこけよ』『……』『第一こんのが十錢とは高い。オイ五十匁にしこうか』

『いや負けてもらつて百々買はうぜ。君イー百々くれよ』『……』  
 「俺はいらねーや』『一層俺もよそうかな』彼女袋を片手に菓子を入れたり出したりウロ／＼してたが忽ち、『そんなに欲しくないならよしなよ』ブン／＼し乍らカリントをザラリあけるとさつさと賣上の勘定なんかバチ／＼と始めて了ふ。

『そんな事云はないで賣つて呉れよ』  
 『やだよ。賣らないよ』ブン／＼である。

『何を賣らないんだい』誰かゞ下らない事を聞く。徒然なる儘

に面白がつて三人色々ひやかして居る。彼女憤然、ツと立つて『番頭さんに言ひ付けてやるツ』と奥に引込んで了つたらしい。暫くしてドヤ／＼と足音がして、まさかと思つた番頭達が出て來たのである。『アソッ達だよ』彼女が涙ぐんで訴へるのである。

『困りますね。若い者をからかつたりして。何でも昨日もこんな事があつたそ、うだが、とにかくこれからはよして下さいツ』厳しいお宣託。後の方からついて來たオカミさんはオカミさんで『本当にしやうがないよ。大の男がこんな小さな者をからかたりして、まだ子供なんですからねツ。今度したら唯ちや置かないよツ』金切聲の語尾がふるえた。三人爲す事もなく茫然としてる。又今度は彼のガール奴、『アソコでニヤ／＼してる奴一番やな奴だよツ』と指をさして睨む。三人ビックリして一瞬顔見合はせた後、めい／＼自分がと思つてよく彼女の指先を辿る。さうしてもTの所らしい。XとSホツとした様にニヤ／＼をこすいたが、この儘馬鹿みたいに黙つて居る位格好のつかないものはない。するを決心

したものかXつか／＼と番頭の前へ立はだかり生眞面目な顔をした。

『オイ番頭さん。人聞きの悪い事をガミ／＼言つちや困りますよ。一寸ばかり冗談を言つた位でかうきめつけられちや堪られえや。大體からあの娘さんは少しヒスの方ちやないんですか。一寸おアシを出すのに暇ござれた位でもう賣らないつてブン／＼怒つて了ふなんてどうも普通ぢやねえ』

『…………』

『とにかく困るのはこっちなんだ。けしからん。あんな怒りつぽい娘さんにか、つちや一年生の若いもんなんかこわくつて買物にも来られやしない。氣が鎮つたらアンタからもよく話しこいて呉れ。チヨツ、けしからん』こんな事日頃おこなしいXによく言へたもんだ。

番頭目を白黒して何とも答へやうのない隙に三人廻れ右。『アーハ、あんな若いコのヒステリーなんて始めてだ』…………

それから數日経つて又菓子を買ひに行つた時、又例の三人さりげなく『少し負けさけよ』する意外、彼女釋然ニッコリ笑つて『あんた達だけにはもう何も負けてやらないよ』だつてさ。

## 續 あだな考

K A N P

そもそも「あだな考」なるものが「針葉樹」ないしは會報に現はれて先輩現役の耳目を襲ひしは、余の記憶せる範圍にては「針

「葉樹第五號」山小屋欄に於ける、雲なる人の「あだな」及びT.O.T.Z.A.Nなる人の「あだな考」を以て嚆矢とする。次に針葉樹會報第五年第五號には勇名を一世に轟かせしA.R.Aなる御人の「あだな考」見ゆ。

時移り人變り異なるあだなも誕生しければ、余も又先人の筆の跡にならひて此處にものせんとす。先づ本科に於ては代表の林俊介

君、彼がニクナメは既に人口に膾炙せる「凡兒」である。かの有名なる只野凡兒のモデルは彼との事。「ポンチヤン」と呼ぶを可とす。然れども、彼ベンネームを又「クン」と云ふ。此の來歴に就ては彼贅言を用ふれどあたらず。おそらくは君子ならんとする意なる可し。古の君子、末世に於て凡兒と化す、いさおぞまし。

次は越後の產（おつさくまさんに叱られ相だが——）齋藤正治君、「ショーンチヤマ」とは如何に。曾て未だ雪深き飯豊の山に旅をせし凡兒、エチ坊及び齋藤の三名、目的を達し新潟縣は新發田なる齋藤家に立寄り一夜の饗應にあづかりし折、家人の齋藤君を呼ぶに「ショーンチヤマ」を以てせりと。「正治様」と呼びて「ショーンチヤマ」と聞えるにや將又はじめより「ショーンチヤマ」と云ふにや余の詳にするところに非ず。

さて武藏國は秩父郡の豪士、柿原謙一君。君、入部より日をけみすること未だ年餘なれど、部の爲に盡力すること少なからず。よつて荒次郎大人より「神主」なる稱號を受けしは君が一生一代の榮譽なり。以てあだなせん。出典に曰く、三峰山は彼がリープリングスゲビート（「先蹤者」の著者によれば）なるべく「神主」と

は「三峰神社神主」の云ひなり。

森脇芳之君、「番公」通稱「パンチヤン」と呼ぶ。その名の生れしは今を去る凡そ二年の昔、五色にスキを滑らせし時なり。「飯もつてこい」と彼に向ひてござりし人の一人にてはあらざりし。

小林重吉君、此の人多趣味多才（？）にやあらん。あだなも亦種々ありてさだかならず。而れども「アンコー」と云ふは蓋し最良たる可く彼に拜顔の榮を賜はりし人の等しく「アンコー」の「アンコー」たる所以に首肯く處なり。彼を又吉屋司朗と云ひしこあたり。（「針葉樹第七號」山小舎に自ら記す）（吉屋信子＋大辻司彌）トのなる式より生る。蓋しと單純なる彼にかかる複雜極まりなき名前のふさはしからざるは自明の理なり。

現役中の最たるもの小谷部全助君「助サン」と呼ぶは正しく彼が人相を彷彿せしむ。「全助」なる名前は四書五經の何れかに「全部助平約而全助也」と見えしと憶ゆ。助は又救助に通するとか。彼の山に於て人を助し、シニにして止まらず。「助」なる字の御利益甚大なり。

専門部に移りては、勇將鷹野雄一君、「エチオビヤ」なり。

彼が膚の色の人二倍黒きが故に、「エチオビヤ」と云ふあだなは、すこぶる似合はし。「エチ坊」と呼ぶは彼が又一面愛らしき（エヘッ！ 氣持が悪い！）故か。

新羅二郎君「サブロー」と呼ばん。新羅二郎と云へば國史の點は零なることを疑ひなし。

いよく多士濟々の豫科へ移らば、筆頭にあがるは森川眞三郎君、君不幸にして、未だ適確なるあだなし。餘りに餘りに特性のあり過ぎる爲ぞかし。

注意の程御肝心。「カマキリ」を云ひ「バツタ」を云ひ、共に全部を盡さず。兩ながら假稱なれど暫しこれを用ひん。

鷺崎雄四郎君、「ユウ公」又は「ユーチヤン」。雄は又悠なる所以か。

次に來るは佐々木誠君、「入道」を進呈せん。余、今夏玄文澤の天幕近き處にて、夕暗せまる程に眼前咫尺の地に於て、焼岳よりも高く雲をつく大入道を見き。そは正しく佐々木君なりき。君もごより佐々木誠海入道なる故、驚くにあたらず。

榎本直司君、「エテ公」なり。君が先祖は疑ひもなく猿公にてやあらん。怒り給ふな。君が動作のサルに似てゴザル事よ！ これも玄文澤にて君が木に登りたるを見し者は齋しく疑ひをはさむまじ。

西野博君、「伯爵」。こは汝がこそなり。曾て汝の山に旅せし折、一夜の宿を求めし山小舎の帳面に記せしに曰く、伯爵西野博云々。待遇の汝が一人断然よく、同行者の僻みしさは眞なりや僞なりや。余親しく見ざりしを遺憾となす。

湯田坂哲君、君を呼ぶに人「ガンナー」を以てす。あの眼、あの唇、あの顎骨、それにあの眼鏡。他人の空似とは君がこそか。塙本駿君、君と共に居ること既に久しく君のニクナメなきこそ又淋し。駿はシユンと呼ぶかハヤシと呼ぶか將又、タカシと呼

ぶか知らざれど「シユン」はこれ又ニクナメとして用ふるに不可ならざる可し。

次には若手チヤキ／＼の岩崎利一君、「ハシゴ」である。呼ぶに多少不便を感じる爲、利一をつめて「リチ」と云ふものもあれば又その顔の猫に似てゐるより「ネコイチ」と云ふものもあり。然れ共「ハシゴ」を可とす。由來は昨秋の甲斐駒に於てなり。

原鐵三郎君、鐵の如く黙して語らず、と云つて深く藏するにて

もあらざらん。「テツサン」は如何に。

高原龍雄君、ポンチヤンは曾て君のことを「公爵」と云ひたり（「會報第六年第五號」を見よ）。蓋しあたれり。公爵の如き容貌を備へればなり。前記「伯爵」こはいさゝかおもむきを異にする。君自重せよ。

次に記したきは豫科、専門部の新入生なれば、未だこれと云はまほしきあだな見當らず。急ぎて捏造せんよりはむしろ機熟するを待つを至當とする。先に谷川岳、三峰さては槍、穗高にてその山行の第一歩を得、更に今秋は、いよく本格的登攀をなさる可き前途洋洋たる諸君には矢次早に、ほゝえましきあだなのつくこと、愚考いたす。なげかず、さわがず、暫くは名無之權兵衛にてまたれよかし。

かく申す余に就て一言せずんば卑怯なる振舞ひと思召すむきもあらんかと存す。然れ共余に關しては既に前記「會報五年五號」の誌上に於てARA君が簡（「干瓢」のカンではないぞ！）にして要を極めたる言辭を與へられたれば、今更贅言を要すまじ。

つらく古き歴史よりおもん見れば、會報も遂に五拾號にまで達し、そのかみ動物園の代名詞にて始められたるを覺ゆる針葉樹會にても最近では動物のみならず、種々なる名前の殖えしこそ、更にこれに山岳部も加へれば、おごろく可し、上は動物より、化物、貴族、食物、魚類、下は昆蟲に至る迄種々様々なる有機物、無機物發生しそのガアリエテに富むこと實に宇内に冠絶す。

かゝる「あだな仲間」に於ても「長幼有序」とは正しく拳々服膺せざる可らざる金科玉條にして、かくしてこそ圓滿なる大家族が維持さるべきものと思惟するなり。これは勿論新らしき部員諸君に云ひ度きことなり。

(一九三四・八・一四)

註(右の日附一九三四は原稿通りにて校正の誤に非す)。

### 人夫募集

孫

人夫數名至急求む不給日當但食餌付可成擔力脚力有者十月

中旬谷川附近天幕生活三・四日滯在見込委細本人來談

針葉樹會内二七會

### 山岳部報告

日誌(七、八、九月)

○夏山相談會 七月一日 於國立部室

(出席部員) 本科四名、豫科十二名、専門部四名

○針葉樹第八號編輯相談會 八月七日

林、小谷部、森脇、望月、小林、鷹野、森川、岩崎の八名參集して協議す。

十月の中頃、神嘗祭と日曜の間の二日のウイークデーを休むこと四日の山旅が出来る。氣候はよし、紅葉はよし、何處ぞ東京からあまり遠くなくて人跡稀な處へ天幕を張つて、登るもよし、寝るもよし、語るもよしこいふ至極ノンビリとした山旅をしやうとい

ふやうな話が、さる二七會の席で、酒間に始まつた。どこ、こゝ、色々と候補地に頭をひねつた揚句、思ひ當つたのが谷川の本谷のツメの邊に天幕をかつぎ込んで、登りたい人は千ノ倉でも萬太郎でもどうぞ御自由に、寝て居たい人は眠り病にでも御かりなさいといふ工合にやらうといふことになつたが、さて食糧、寝具其他等々と數えて來るご大分の荷物になるのでどうしても人夫が必要だ。そこで現役動員といふことになつたが、無償では可愛想だし、日當をたんまりとられては間に合はんし、考へ付いたのが「食餌付」といふ手だ。どうです、カツ丼二杯の諸君、奮つて此行に參加する勇志無きや。

○夏山報告會 九月十六日午後三時より 於國立志みづ

(出席郡員) 本科九名、豫科十二名、専門部二名

今夏の登山の情況を概略報告。「針葉樹第八號」の編輯に就いての説明等。會食して、部歌を唱ひ六時半閉會。打揃つて針葉樹會へのりこむ。

### 夏山記録 (七、八月)

#### A. 北アルプス

- (1) 上高地—前穂高—涸澤—上高地 (七、一〇)—小谷部
- (2) 烏帽子、槍縦走—上高地 (七、一一一七)—森脇、和田、佐々木、他二名
- (3) 高瀬入り、槍へ (七、一二一三)—小林、鷺野
- (4) 殺生小舍滞在 (大槍東面及小槍) (七、一二一五)—小谷郡、岩崎、鷺野、小林
- (5) 燕槍縦走—上高地 (七、一三一一五)—柿原、小柳、森川、日江井、毛塚、齊藤、秦、内田、他一名
- (6) 團衛谷—天上澤—上高地 (七、一八一一二)—吉澤、近藤 (以上先輩)、望月、他一名、下川 (案内)
- (7) 上高地—槍—穂高—涸澤—上高地 (七、一八一一〇)—原、高原、新羅、松浦
- (8) 明神及前穂—上高地 (七、一九一一〇)—鷺野、鷺崎
- (9) 明神及穂高縦走 (七、一九一二二)—森川、榎本、岩崎
- (10) 上高地—前穂高 (七、一九)—齊藤、毛塚、日江井、内田

- (11) 疊岩往復 (七、一九)—森脇、佐々木
- (12) 疊岩より奥穂 (七、一九一二〇)—小谷部、和田、他一名
- (13) 常念、蝶、大瀧 (七、二一一二二)—内田
- (14) 大瀧、蝶、常念 (七、二三一一四)—望月、榎本、岩崎
- (15) 潤澤生活 (北尾根、ジヤンダルム) (七、二三一一六)—小林、小柳、森川、鷺崎、佐々木
- (16) 乘鞍岳 (七、二五一一六)—内田
- (17) 錫杖烏帽子岩 (七、二五一二六)—小谷郡、齊藤 (正)
- (18) 上高地より天狗岩東面 (七、二六)—鷺野
- (19) 錫杖—槍平—槍肩 (小槍東面)—上高地 (七、二七一一八)—小谷部、齊藤 (正)
- ▽上高地天幕は七月九日より同廿九日まで玄文澤に張つた。參加總員三十三名、内部員廿三名、先輩二名、部員外學生五名、其他三名と云ふ盛況であつた。
- (20) 針ノ木—内藏之助—剣—黒部 (八、一〇一一二)—齊藤 (正)、他三名
- (21) カクネ里 (八、二二一一九、二)—小谷部、森川、鷺野
- (22) 立山—薬師 (八、二五一一九、八)—林、岩崎

#### B. 其の他の地方

- (23) 武州大岳山 (七、七)—林
  - (24) 奥日光、白根山 (七、二七一一三〇)—高原、原
  - (25) 雁坂峠、和名倉山 (八、二六一一二八)—小林、柿原
- ▽九月は、例の學校の問題、「針葉樹」編纂の仕事、加ふるに不

順な天候も手傳つて、我々の足を止めて了つた。珍らしく登行記録は一つもありません。

### 針葉樹會例會 八月廿日(火) 如水會館中集會室

出席者(會員) 中川、吉澤、近藤、村尾、芋川、園山、

吉澤(松)

(學生) 林、鷹野、小林、小谷部、塙本、森川、

望月、佐々木、和田、岩崎、

### 針葉樹會例會 九月十六日(月) 如水會館中集會堂

出席者(會員) 中川、松木、吉澤、近藤、磯野、横倉、

園山、増山、清水、勝田、吉澤(松)。

(學生) 林、齊藤、小柳、望月、鷹野、柿原、森川、小林、小谷部、新羅、佐々木、原、

秦、榎本、岩崎

### 針葉樹會例會 拾月二十三日(水) 如水會館矢野會議室

出席者(會員) 中川、吉澤、村尾、矢作、近藤、芋川、

園山、増山、鈴木、吉澤(松)

(學生) 林、望月、柿原、小谷部、岩崎

### 登高記錄

十月十九日、廿日

梓山一川端下—金峰—上黒平—甲府

二十日は素晴らしい快晴だつた。金峰の頂上へ出た途端に  
淺間の爆發を目撃したのは此行隨一の収穫だつた。

### 會員消息

吉澤一郎君 芝區田村町二ノ八ト名簿訂正。

高橋要二君 淺草區馬道一ノ二ノ四に番地改正。

### 編輯後記

最近續々と會報に怪作が現れ、而も其の著者のベンネームたるや、何と讀んで良いのか解らぬ。索引を作れとの要求が多いので不敢小生編輯の第六年第四號以下第八號迄、夫々難解なるものにつき次に解説をして置く。尙最新の「あだな」に就ては本號中の「續あだな考……K A N P」を參照せられ度い。

第五號	ク	ン	林 俊介君
第六號	木	公	吉澤松次郎君
"	三	角	松木謙三君
第八號	A	N	望月達夫君
"	K	P	鷹野雄一君
"	E	C	豊竹鎧太夫
"	T	O	園山徳三郎君

大阪の中島孚君にお詫びしますが貴兄の「スキーの思出」は色々な手違から最近小生の手に這入りました。時期を失して變な時に載せて申譯ありませんが不惡御諒承下さい。

以上